

心動くままに

手話を学んで

S

私の手話との最初の出会いはいつだったろうか？

十五年位は前である。その頃の私はまだ自分が吃音者（＝言語障害者）であるということを隠そうという意識が強く、そもそも吃音者が障害者という意識も明確ではなかった。だから手話は単に聴覚障害者の言葉という意識しかなく、英語や外国語と同じでしかなく、音読と単語を覚えるのが「苦手」な私には、そして漠然とながら自らの障害者としての位置を隠そうしている私には疎いこととして有った。

それから数年して障害者運動の波及の中で、私自身がまた漠然と障害者意識にめざめていく。その時手話は障害者運動をする上で、やっているかかわっているということのシンボルとしてあった。だが部分的にしかかかわれなかった私には本格的に勉強する時間はなく、また語学を苦手ということを超えるエネルギーは持ちえていなかった。そもそも、その時は結局吃音者宣言をなしえなかったし、僅かながら拘わりをもった障害者運動とも切れてしまう。

それから5年余やっと吃音者宣言をなして、吃音者の集まりである言友会に参加しはじめたころから、障害者運動としての吃音者運動という指向性で、障害者運動のシンボルとしての手話を勉強したいという思いが湧いて来た。また、障害者運動を進めるということで、他の障害者との交流を持ちたいという思いがあった。京都では、言友会一言語障害者と聴覚障害者が聴言センターを作ったという話も聞いていた。

手話の勉強を始めよう始めようと思いながら、言友会との拘わりでグジュグジュしている内に、中途失聴者が言友会の講談リズム話法のことを聞いて発声練習をしたいと訪ねてきたり、吃音者の中高生の集いに来た中途失聴者の母親との出会いを経る中で、現実的ふれあいの必要に迫られ、やっと手話を勉強し始める。

手話を勉強していて感じたのは、それは確かに障害者総体の運動のシンボルではないし、シンボルというとならえた自体が自己満足的なニュアンスをもっている、そのようなこととしてシンボルとしてとらえていた自分の限界性である。

もう一つは、手話は聴覚障害者のコミュニケーションの手段だけでなく、聴覚障害者のアイデンティティとしてあるということである。

手話は一般的な言語ではない。一般的に英語や外国語を勉強することではない。ちょうど差別の中で生きて来た「在日」の2世3世が、「母国語」を勉強することと同じ位置にあるのではないだろうか。又、言語ではないが、黒人がジャズをやることと同じ位相にあるのではないだろうか。

健聴者の中で生活してきた聴覚障害者が手話を勉強しはじめた時、自分の心が劈くという思いを抱いた、という話を聞いたことがある。手話は聴覚障害者の文化であり、聴障者が自らが聴障者であることを宣言し、誇りをもって生きる生き方をつかむ、アイデンティ

ティをつかむ核としてあるのではないだろうか

では、健聴者が手話を勉強するということはどういうことだろうか？

手話の勉強をしている健聴者から、その場に来るとホッとする、という話を聞いたことがある。手話という聴障者の文化のあたたかさがあるのではないだろうか。 障害者の社会参加ということが言われて久しい。けれどその参加しようとする社会はバラ色の世界ではない。障害者の社会参加ということも、社会から色々な形で排除されている現状―差別と闘うという内容を持っているし、必要なことなのだけれど、一方でむしろ新しい社会、差別のない社会を障害者と健常者で共に作り上げていく運動が必要ではないだろうか そのことに障害者の果たす役割は大きい。障害者―被差別者が新しい世界を作る！のである。

そういう内容を孕んで、健常者が障害者の文化に参加することとして、健常者の手話の勉強があり、健常者の中に手話を広めることがあるのではないだろうか

私の言語障害者の立場としては、私自身が手話を勉強する中で心を劈いたのだけれど、手話を言語障害者の中に広めることで、心を劈く多くの言語障害者が見いだせるのではないか、という思いを抱く。

又、健常者の方ばかりを向いて、その価値観―世界観（＝健全者幻想）にとらわれて来た吃音者には、手話の素晴らしさ、障害者の文化の素晴らしさを見詰める中で、障害者の立場に立つということの触媒となるのではないかと思いを馳せる。